

# 日本色彩学会創立 35 周年を迎えて

日本色彩学会 創立 35 周年 記念号発行にあたり、学会の発展に尽力されて参りました名誉会員の方々、及び外国の 3 人の色彩学者から、ご挨拶を戴きました。尚、篠田軍治、須賀太郎の両氏は、病氣加療中との連絡を戴きました。一日も早いご回復を祈ります。

## 色彩開眼

東 堯



私は 1982 年 11 月に東芝中央病院で右眼に白内障手術をしてもらった。経過は良好で、現在、ハードのコンタクトレンズ (c.l.) をつけて、両眼とも視力 1.0~1.2 を保っている。この手術は、角膜をはがし、濁った水晶体を抜き取った上、角膜を元の位置に縫合するという精妙なものであって、抜き取った水晶体はビールびんのアンバー色ほどに黄変していた。

手術後、左右の目の色順応に大差を感じたので、東芝総研の森礼於研究室で測定して、結果を 研究報告\* にまとめた。

現在、私は左右の色覚のちがいに馴れたが、さらに進んで、その差を楽しむという心境になっている。

左眼は 72 歳老人の色覚で、右眼は 5 歳くらい (c.l. にうすいアンバー色がついている) の幼児の色覚であって、片方をつぶるだけで、老幼の色覚を味わい分けられるからである。その内容は、右眼は左眼に比べて、青系の物体色をより高明度、より高彩度に感じ、周囲の物体色から青味をかき出そうとする傾向がある。緑系に対しても似た方向であるが、その程度は弱い。紫系に対しては劇的であって、より高明度、より高彩度の上に、色相が青寄りに変化する。左眼にはくすんだ紫に見える色が、右眼には幾分青寄りの色相で鮮かさを増した美しい紫に見えるのである。赤、黄の系統に対して、左右の色覚は同等である。

その結果、絵画、陶磁器の鑑賞、風景の味わいが変わってきて、例えば、青を主体とした絵画を右眼で観ると、画布上の青の変化の妙味を、画家自身よりも深く味わっているのではないかと自惚れることがある。

“色彩と年齢”、“色覚の若返り”など、これからの色彩学の研究テーマになってもいいように思う。

\* 森、河本、秋山、東、土方：色彩学会誌 7-1(1983)52

## 後輩にむけて

大島 正光



色彩学が確立されて来たのは色彩学会の確立にもつながっていることから両者もちつもたれつであると推定もできることである。

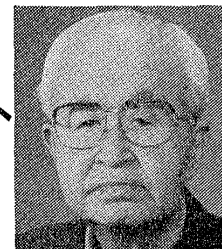
色彩学を対象に考えてみると、学問は分化と総合とをくりかえしながら進展してゆくものである。したがって分化だけでよいものでもなく、また総合だけでもなく、この両者のバランスがなければならない。分化で学問は終りかと思っはいけないであろう。そのときに総合化の分野で新しい道が開かれてゆくものである。

学問の分野からながめてみると情報化時代の特徴というものは、多くの情報からそれを集大成させて新しい道を開拓してゆくことも学問の内でやらなければならないことである。

一つどうぞ後輩の方々も、これがだめならあれをやるという執念さをもって、研究を進めてもらいたいと思う。

## 色彩の科学が 地球的総合計画へ

岡田 喜義



約 500 年前にダビンチの色彩手記があり、約 300 年前にニュートンがスペクトルを発見し、約 130 年前にはヘルムホルツが三原色説を大成し、CIE に日本も参加して XYZ 方式を約 55 年前に公式に採用した。その後諸先輩により有力な測色器械が開発され、電子技術・電算技術・照明技術・情報科学など関連科学の威力を総合し